

焼き物の楽しみ(89・9・12 東京分館)

伊東 正典(昭12文丙)

只今御紹介頂きました十二年卒の伊東でございます。

さてこんな暑い時に焼き物の話なんてとんでもないことだ、と。こういう話は、芸術の秋とかあるいは冬の夜長には相応わしいかと思いますが、しかしまあ一応これでも六年余り、焼き物に取り憑^ッかれてやって参りましたので、勿論プロの作家ではありませんが素人の私なりに、いたい焼き物というのはどんな物か、そして焼き物の面白さ、楽しみはどういうところにあるんだろうか、というようなことを、肩のこらない話を気楽にしますので、どうぞ皆さんも召し上がりながらお聞き下さい。

一 焼き物との出会い

お手許の資料の順序に従って先ずはじめに焼き物との出会いについてお話ししましょう。実を

申しますと、焼き物との出会いはもう子供の頃にあったと思われます。と申しますのは、私の生れた家というのは、石川県加賀市という前田百万石の分封十萬石の城下町に在る旧い家でした。とにかく三百年前から前田公のいわゆる通商御用を勤めていたらしく、海路では例の北前船での遠くは北海道、九州の物資、陸路では京、近江の物資の購入、運送によって加賀藩御用達をやっていたわけです。併せてまた各地方にもあったような「本陣」も二百年余り勤めた家でした。そういう家に生れ育ったので、家の中至る所に骨董品のような変な物がごろごろあったように思います。従って焼き物などについても両親や出入り人達がいろいろ喋るのを見聞きしていたようです。

しかし当時の地方にもよくある例で、地方の旧家というのは、明治、大正の社会、經濟の變動に対応出来ず、我が家も御多分に漏れず没落したものと思われます。今でも当時の子供心に覚えておりますが、大正十年頃の情景です。乳母に連れられて帰宅しますと、あの何時もは薄暗い大広間に煌々と電氣をつけて多勢の仲買人達が奇声を張り上げながら競り売りをやっているのを見た。金沢からの骨董屋、京、大阪からも来ていたとのことでした。何しろ二百年、三百年前の前田公拝領その他の刀劍、書画、骨董など次々と競り売りされたそうで、熱氣の溢れたざわめきの異様な光景が今でも眼に浮んで参ります。

皆さんも御存知のように加賀百万石歴代の前田公は健全財政に立脚して文化、芸術の向上に努

めましたので、九谷焼、輪島塗、加賀友禅、金箔等々の美術工芸はいうまでもなく、茶道、華道、謡曲等の歌舞音曲に至るまで我が国近世文化に少なからぬ貢献があったと思われまます。

すっかりお国自慢の横道に外れましたが、競売の品々の中には片山津温泉の矢田屋に例の吉田屋古九谷の皿が現在所蔵されているとか、利春公（六代）拝領の古備前の壺が京都にあるとか、残念そうに父の話したのを思い出します。さて中学に行きます頃から父の仕事の都合で十二年余り京都北白川に住んでおりましたが、年に二、三度は父のお供をして郷里加賀に帰り、その都度、父や親戚の人達と一緒に蔵の中の整理を手伝わされたものです。そういう時には「伊万里だ」、「九谷だ」、「萩だ」、「備前だ」などと教えられたものです。今から思いますとこれが焼き物との出合いの始めだったといえます。

いささか自己紹介めいたことになって恐縮ですが、私は昭和十五年卒業時にはすでに先祖以来の家業にも関係あり、また生来の船好きとあって、大阪商船入社が内定しておりましたが、中学以来の尊敬する大先輩である岸田幸雄さんのお勧めに従って急拠、当時国策会社として創立された日本発送電株式会社に入社しましたが、現在の九電力社を統合したものでその第一期生か二期生でした。

しかし多くの皆様も体験されたように、召集とか抑留とか甚しきは戦病死といった悲運にめぐり合わされた方々も少なくない中で、私も第二次大戦による運命の変転に伴いまして、結局は敗

戦と同時に郷里の方に呼び戻され家業の如きものを継ぐこととなったわけです。前にも述べましたが、加賀藩御用達物資の購入、運送は明治維新の後は大正、昭和に至って、日通、商船、及び各商社との間で新しい商体系となっていました。終戦直後の暗澹たる中で戸惑うばかりでした。その後石川県、金沢市、私共財界人の共同出資の第三セクターとしての海運会社が設立されて以来、その専務、社長等を永年勤めて金沢市に居住していたわけです。当時、金沢を中心とする北陸の財界人の中には焼き物の好きな人達も多く、また博物館副館長や九谷焼窯元作家の方々とも面識を得て、船会社、商社幹部の皆さんを窯元に案内したりしましたし、又金沢には楽焼に類する「大樋焼」がありますが、先代の大樋長左衛門さんとも親交を得て、楽茶碗の魅力にとり憑かれたものです。

このように焼き物との出会いはいよいよ深まりましたから、各地方に出張などで旅行の折には、萩とか備前とか瀬戸等にも立ち寄り窯元を訪ねたものです。尚又、国交回復後の中国には日中海運協定の仕事などで何度も訪れましたが、その都度、寸暇を見て中国陶磁器の見聞を拡げることが出来ました。

さて六年前、一切の会社関係の仕事から隠退し、戦前居住した横浜が懐しく、また近くに娘一家もおるといふことで鎌倉と境を接する所に居を構えることとなりました。

此の頃、娘が陶芸を習っている芸大出の新進作家大坂氏が近くにおられると知り、紹介して貰

うこととなりました。

早速同氏に会って焼き物の話をしているうちに、かねて隠退後は「観る楽しみ」から、「造る楽しみ」へ、が夢でありましたから焼き物に取り組む決断は早かったように思います。そこで業者を選んで宅地裏庭に窯小屋と材料小屋をしつらえ、ガス窯、電動ロクロ、コンプレッサーの他諸々の小道具類に各産地の粘土や釉薬等を整え準備し、良き師匠の指導を受けながら無我夢中の苦闘が続きました。

土と焰の美に取り惹かれてすでに六年間、殆んど毎日が土をこね、ロクロに向かわないと落ちつかないような日々を過して参りました。

私と焼き物との出会いは、皆さんから見ても実に奇異に思われましようが、しかしこれも老後の生きがいとして幸せだと思っております。

二 焼き物の歴史

焼き物の歴史は詳しく申せば際限がありませんので恐らく皆様も御存知の事柄をいくらか取りまとめてお話出来ればと思っております。

焼き物の古い歴史ということになりますと、世界各地の遺跡からいろんな物が出ております。従って焼き物の古い歴史は考古学の分野で解明されて来たということでしょうね。

洋の東西を問わず、各地でいろんな遺跡から先史時代の紀元前何百年、いやそれ以前の物がエジプト、中東、スペインあるいは中国等から出土しております。とにかく、人類が火を発見してから土をこねて形を造りそれを焼けば固くなってこわれないと知ったのは、恐らく五万年も前だと言われておりますが、史実としては証明されておりません。

さて我が国ではいわゆる先史時代には縄文土器、次いで紀元前百年から紀元三百年頃までの弥生時代には弥生土器といった物が焼き物の始まりだろうと言われております。

古人達は恐らく野原で土をこねて皿や壺などの器とか土偶、つまり祭祀用の埴輪のようなものを成形し、枯草枯枝などを被せたまままで焼いたものと思われれます。凡そ五、六百度で焼くわけですが、そうしますと一応皿とか碗などの器が出来るわけですね。ただしこれ等は御存知のように釉薬（うわぐすり）は被っておりません。この低温では釉薬は溶けませんから。之等を称して土器と申します。

近時、遺跡の発掘がいよいよ盛んになり全国到る所で各種の土器が出て参ります。専門家が見れば、一口に縄文土器と言ってもその形態、文様の違いで縄文前期の最も古い時代の物か、或いは中期、後期の物かが判ることに、考古学上の時代推定に大きな使命を果しているようです。

さて之に因んで、一昨年秋信州奥地に家族旅行をした時のことを想い出します。御存知の方もおられましようが、「尖石」^{トガリ} 古代住居跡とその博物館を見ましたが、数多の縄文土器などに大き

な感銘を受けて帰宅しました。翌日感銘あらたなうちに、娘が縄文土器に挑戦して、スケッチをもとに大きな壺を造って見たいと言う。私も相談にのって之に使う粘土や藁繩を用意し形成した物が五百度で五時間余りで焼き上がりました。窯出しされた壺は五十センチほどの大きな物で、形状、色合ともなかなか素朴なもので、遠目には如何にも縄文土器らしく娘も喜んでおりましたが、よくよく観ると矢張り「尖石」の土器から漂う神秘さは感じられません。古代人が生活の必要から、大自然の原っぱに枯枝を集めて焼き上げた自然で素朴な心までは真似ることが出来なかったのだろうということになりました。

土器についてはついながらも一つお話し致しますが、先般来、朝日新聞連載で北九州の「吉野が里」遺跡の記事を読んでもりましたが、それによりますと、発掘された古墳は大きな瓶棺でその数は数十個に及び、人骨を納めたままのものもあるとのこと、沢山の炭化状のみみ等も出ておるので、すでに農耕文化の弥生中期、紀元二百年前後のもので、正に卑弥呼の時代の埋葬には大型土器の瓶を棺として使ったらしいとの記事が興味をひきました。私はその記事を読み、一時はかくも多数のしかも人体を納めるほど大型の瓶を、果してあの時代に焼くことが出来ただろうかと、もしかしてあの南国の太陽で連日完全乾燥して、特別緻密な粘土を使ったとしたら焼かずともなどと考えましたが、矢張りそれではもの用の足を足すことにはならないでしょう。さて焼き物の歴史は五世紀頃になりますと例の須恵器スエキの時代にはいります。この頃には中国、

朝鮮から築窯の技術が伝わって来ましたので横穴窯の形式、つまり山の中腹に横穴を掘り煙突を立てて焼けば熱効率も良く、七百度位になりますから、灰も溶けてそれがうわぐすり、釉薬となつて器の表面を覆うことになります。従つて灰釉としての着色と器の強度もやゝ強まります。これが、須恵器で陶芸の上では軟陶器と言つております。

奈良朝、平安朝から鎌倉時代頃までは軟陶器全盛の時代であつたかと思われれます。

しかし奈良正倉院に「正倉院三彩」と呼ばれる焼き物の宝物がありますが、これは紀元七、八百年頃の我が国初めての美しい色彩の焼き物と言われております。

焼き物の歴史はこの後、中世になりますと室町時代にはいよいよ陶器が焼かれるようになり大陸からは一層進んだ技術、技法が伝来して参りました。地上窯では千度から千二百度の高温焼成が可能となり、亦ロクロ等も改善され、同時に釉薬調合の研究も進んで立派な陶器が造られるようになりました。

次いで室町時代から安土桃山時代になりますと、いわゆる安土桃山文化の一翼を担つて我が国独特の優れた焼物文化が見事に開花することになるわけです。

こうしてこの後、中国と並んで世界に冠たる地位を占める我が国の焼き物は陶器と並行しながら磁器の分野においても目覚ましい発展を遂げることとなりますが、ここで歴史の眼を国外に向けて見ましよう。

焼き物の古い歴史は外国では遙か先史の彼方に遡るようですが、特に中国は名実共に焼き物の先進国でした。例えば奈良朝に見合う唐の時代には北京の故宮博物館その他でも見られるようないわゆる「唐三彩」、御覧になった方も多いと思いますが「馬俑」のように緑、青、茶の三色釉薬が素晴らしい発色で焼き上げられた陶器が出来ていたことを考えましても、あらためて中国焼き物文化の深さがわかります。

古来中国各地には多数の焼き物産地があつて中でも北方の「鄭陽」、中、南方の「景德鎮」、「柳泉」等が大きな産地であります。古くは漢の時代から唐、明の時代を経て各時代の朝廷政府は焼き物の生産を奨励しましたので、これがシルクロード、後にはいわゆる海のシルクロードを経て東西交互の交易でありましたから中国以上に古い歴史を持つといわれるペルシャ、エジプト等の作品や釉薬技法が中国に齊らされたわけです。

さて皆さんがヨーロッパに行かれて各地でヨーロッパ磁器のあの華麗、繊細なデイナーセットや壺などを御覧になつたと思いますが、これ等はせいぜい二百年か二百五十年前から、ドイツのマイセン、フランスのセーブルやイギリスのボウなどで盛んに焼かれるようになったようです。海のシルクロードはオランダの「東インドシナ会社」等の海洋交易によつて、「景德鎮」やこれに優るとも劣らぬ「伊万里」の作品や高度技術をヨーロッパに齊らし今日のヨーロッパ磁器を生み出したものと言えます。

さて我が国ではその後例の秀吉の朝鮮出兵、これは大変な失敗ということですが、しかしその所産として朝鮮の陶工、作品等を持ち帰ったといわれ、帰国した諸大名が、例えば鍋島藩では唐津、有田に、毛利藩では萩などにそれぞれ窯を築いて焼き物を造らせるといふ奨励策が効を奏しまして焼き物文化は全国各地に拡がって参ります。こうして徳川時代には日本の焼き物は世界に確固たる地歩をしめるに至ったわけです。

あまり話が堅くなりましたので、次の話に移ります前に、お手許の作品アルバムと、そこに並べました若干の作品を御覧下さい。拙い物ですが素焼きの状態、焼き物の種類等説明書と対比してお判り頂けるかと思えます。

三 焼き物の種類と土、釉薬

焼き物と一口に申しましても、土器に始まって軟陶器、陶器、磁器、それに炆器ヒキというものもあります。

土器は古代に限らず現在でもいろいろ造られております。八百度ほどの低温で五、六時間焼くだけで釉薬はかけません。例えばコンロ、蚊やりとか或は観光地土産品に売っているような土鈴、鳩笛や土人形等があります。しかし我々が一般に焼き物というのは、俗に「瀬戸物」とか「唐津物」などとも言いますし、欧米では「アースンウェア」、「ポースレン」或は「チャイナ」とも言

つて「陶器」、「磁器」と「炆器」を総称するものですが、これ等の区別は一口に言つて使用する土が陶土のみか、或は陶石を主とするか、或はまた釉薬をかけずに焼き締めたものかの違いと言えましよう。

陶器は蛙目粘土^{カヌメ}、珪石、長石などを主成分とする、いわゆる粘土のみを使いますが、磁器はこれ等の他に「カオリン」などの陶石を主成分として使うものであり、炆器は備前焼や信楽焼^{シガラキ}のように釉薬を用いずに高温で長時間焼き締めたものです。これ等三種類の焼き物の特徴は次の通りです。

- 1 陶器 素地は不透明で、吸水性高く、叩くと濁音が聞こえます。
- 2 磁器 素地は半透明で、吸水性少なく、叩くと清澄音が聞こえます。
- 3 炆器 素地は不透明で、吸水性最も少なく、素地は特に緻密ですから、陶器や磁器のように釉薬をかけずとも水漏れはありません。

尚、焼成温度は陶器は千度以上千二百度余りで焼きますが磁器は千三百度以上の高温で焼く点異なります。

焼き物に用いる土と釉薬につきましては、余り話が長くなりますので資料第五を御覧いただくこととしますが、一口で申せば、土はいわゆる粘土で形がくずれずに成型し易い、「可塑性」の高いもの、亦粘着力の強い「粘性」の高いものが必要で、蛙目粘土、珪石、長石等を混合し捻り

上げた物です。磁器を造る場合は之等陶土にカオリン等の陶石粉末を大量に混合して用います。

全国各地の焼き物産地では萩土、備前土或は志野土等、それぞれ特徴ある粘土が使用されてその焼き物の特色が見られるわけです。

次に釉薬につきましてもお手許の資料にありますように、各種の鉱石粉末を調合したものに発色材料として酸化鉄、銅、コバルト等の粉末を溶かして釉薬を造りますが、此の中で珪石は器の表面をガラス状に薄く覆って水漏れを防ぐわけです。

四 焼き物の楽しみ

以上焼き物の種類、土、釉薬について申し上げましたが、最後に焼き物の楽しみについて申し上げ、私の話を終りたいと思います。

焼き物を観る楽しみは皆さんいろいろとございませうが、造る楽しみとなりますと、絵を描く人がキャンバスに向って筆をとる時の心のときめき、といいますがさういった喜び、楽しさ、それと同じような心のふるい立ちがあると思います。さあ何を造るか、花生か、茶碗かまた何焼きにするか、萩焼か織部か或は亦志野焼にするかなど、それに依って使う土や釉薬を選定し、最後の窯入れ焼成までの全ての工程を頭に組み立てて、先ず「ロクロ」に向うのですが、これが造る喜びの第一段階と言えましよう。

成型には初歩の「手びねり」、「紐造り」、「ロクロ成型」等の技法があり、また四角の皿物などは「板造」等も行いますが、要は「土捻り三年」と言つて粘土中の空気を充分に抜き取り、均一の厚味に仕上げることが肝要で、さもないと、焼成時に窯の中で「ひび」、「割れ」の原因となります。さて成型後は充分乾燥期間をとつた後、八百度ほどで「素焼」を行います。

素焼されたそれぞれの器に見合った「釉掛け」がなかなかむづかしくもあり、また楽しみでもあります。釉掛けは「ひたしがけ」、「吹きつけ」その他いろいろの技法があります。

さていよいよ本焼、窯入れの時が参ります。よくプロの作家達は窯入れの際、酒や花を供えてお払いのようなことを致しますが、その気持が良くわかるのです。何しろ数日間、いろんな工程を心魂込めて造り上げた物が、いよいよ窯詰めして十数時間も焼き続けた後、窯出しをした時に果して自分の思つたような物に焼き上つて出て来るかどうか、割れないか、釉薬の溶け具合は、発色は如何に等々、心に念じつつ火入れを行つていきます。

本焼きは物にもよりますが総じて最初低温から徐々に温度を上げながら約三百度までは、「あぶり」と称してゆっくり時間をかけて水分を除きます。四、五時間を経て八百度以上からいよいよ「攻め」の段階で温度を上げて行き、十数時間後千二、三百度に達するまでは緊張の時間が続きます。「火色見窓」を通しての不断の火色観察が最も大切であつて、その熟練度が作品の出来不出来を決めるとも言われております。焼き物の焼成温度は「楽焼」の八百度から磁器の千三百

度までそれぞれ適温があることは先に申し上げましたが、いずれにしても限度に達した後は急冷が禁物ですから徐々に温度を下げて、いわゆる「ねらし」の段階で火を止めます。

さて早朝火入れして終日焼き続けた翌日午後にいよいよ窯出しとなります。

不安と期待の緊張のうちに扉を開ける瞬間が焼き物の最大の喜びと言えますよう。

出来の良い物、悪い物、悲喜交もごもの窯出しですが、時には予期しないような物がうまく出ることがあって、そういう喜びは格別です。

以上ながながと焼き物の楽しみについて話して参りましたが、皆さん焼き物の楽しみは人によってさまざまです。例えば伊万里や九谷、京焼とか中国の景德鎮或はヨーロッパ磁器のような精緻、華麗な物を好む方、一方「茶陶」を主とした萩、志野、織部や黄瀬戸等わび、さびの風合フウアイに惹かれる方、そして亦備前や信楽等素朴、豪放な土と焰の芸術を楽しむ方といろいろあります。

六十七歳の早過ぎた隠退後、私はゴルフや油絵だけでは物足りぬ思いで、この六年間の毎日を陶芸に魅せられて、漸く地元の美術協会にも入れて頂き、小さな展覧会にも出品出来るようになりました。

たまたま家内がお茶などやっておりますので、自作の茶碗や水指を使った茶室に座って床の間のこれ亦自作の花生等眺めながら、独り悦に入っている滑稽な自分が本当に幸せ者だと感謝して

おります。

最後に長い退屈な話をお聞き頂いたことを感謝申し上げますと共に、どうぞ皆さんも高齢化社会での老後を、それこそ三高自由の精神のもとに、夫々の御趣味に添って益々健康にお過し下さるよう祈りながら、拙い話を終らせて頂きます。

(前 株式会社金沢港運社長)